物語があるからこそ人が集まり、
人気店になる美容室
「S.Blanket（エスブランケット）」

技術やサービスはもちろん、イキイキと働くスタッフが魅力的なヘアサロン

想いのあるところに人は集う。それがストーリーとなったとき、
また多くの人を動かす力となる。

相鉄線「二俣川駅」北口に広がる二俣川商店街に、1店の美容室がある。その美容室の名前は、2012年3月1日にオープンした「S.Blanket」。ある一人の男の想いが、多くの仲間を惹きつけて、二俣川商店街の地で魅力的なストーリーを紡ぎだしている。まだ始まったばかりの物語に、少し耳を傾けてみたい。

―S.Blanket店長、山田勇希の決断―

――このままでいいのか？

その言葉が、美容室S.Blanket（エスブランケット）の店長である山田勇希（やまだ・ゆうき）さんの胸に突き刺さった。
「当時、美容師として５年近くキャリアを積んだころでした。そのまま東京に残るか、地元の広島に帰るかで悩んでいましたね」

オーナーの竹内さんとの出会いについて語ってくれる山田さん

山田さんは18歳で地元の広島から上京し、川崎の新百合ヶ丘の美容室でスタイリストとして働いていた。しかし、その店を辞めて、これからの方向性に悩んでいたという。当時22歳である。

そんな時、竹内さんことS.Blanketのオーナーである竹内文三（たけうち・ぶんぞう）さんに言われた「お前、このままでいいのか？」という言葉。山田さんは、心の中で何かが動くのを感じた。

瀟洒（しょうしゃ）な造りの美容院S.Blanket（エスブランケット）

そんな竹内さんと山田さんとの出会いは、山田さんが18歳のころ、上京してすぐの時期であったそうだ。当時の様子を、山田さんはこのように振り返る。

「実は当時、最初に勤めた新百合ヶ丘のお店で、竹内さんも働いていました。初めて店に行って扉を開けた瞬間、『いらっしゃいませ』と、渋い声で出迎えられたんです。オールバックにスマートな佇まいで、なんだこの人、めちゃくちゃカッコいいと思いましたね」

山田さんは、一瞬のうちに竹内さんの魅力に惹きつけられたという。そして１年半ほど一緒に竹内さんと働いた。竹内さんがお店を辞めて、別の美容室で働いてからも付き合いは続き、定期的に会っていたそうだ。しかし10歳離れた竹内さんとの出会いが、その後の自分の人生を左右することになるとは、この時は想像さえしなかった。

真剣な表情で自身のキャリアについて振り返ってくれた

――このままでいいのだろうか？

竹内さんから掛けられた言葉で山田さんの心は動き、一つの答えが出た。山田さんは東京に残って、スタイリストとしてのスキルを磨いていくことを決意。そこでまた、グループ店ではあるが竹内さんと同じ美容室で働くことにしたそうだ。

そして山田さんは新たなフィールドで、スタイリストとしてのキャリアを順調に積んでいった。しかし、それから数年後また山田さんの運命が動き出す。そのきっかけは、やはり竹内さんであった。

S.Blanketの内観も落ち着いた造りになっている

「そのお店で3年近く勤めたころ、竹内さんから美容室を立ち上げるという話を聞きました。それがS.Blanketです。そこで自分も一緒に立ち上げから参加して、また一緒に竹内さんと働くことになりました」
はじめ副店長としてS.Blanketで働き始めた山田さんであるが、現在は店長を任されるまでになった。S.Blanketには山田さんを含め、3名のスタッフが在籍している。店長としてのやりがいについて、山田さんはこのように語った。

「何かを達成することで、スタッフのモチベーションは高くなります。そのため店長として、お店の目標を達成することが大切です。スタッフがやりがいを感じることが、自分のやりがいにも繋がっています」

お店の小物もオシャレで穏やかな空間を演出している

人とお金のマネジメントを任され、S.Blanketの運営にあたっている山田さん。そんな中、山田さんには仕事中に心がけていることがあるという。

「スピードと笑顔は特に心がけています。プロフェッショナルとして、常に一定の状態に自分を保つことが重要です。それが過ごしやすいお店作りにも繋がっていくと思います」

お店には女性客の方が多く来店されるらしいが、山田さんは中高生の男子生徒に人気があるそうだ。飾らず親しみやすい感じが、年下世代の心をつかんでいるのだろう。

竹内さんのことを語るとき良い笑顔をされています

山田さんと竹内さんの付き合いが始まって11年目。そして現在、山田さんは出会ったころの竹内さんと同じ28歳となった。そのことに関して山田さんは、「竹内さんは、一番尊敬している人です」と言うと、このように語ってくれた。

「竹内さんには、まだまだ追いつけていません。人を惹きつける力が、すごい方だと感じています。自分も竹内さんと出会っていなかったら、今ごろ田舎に帰っていたかもしれません。ただ今は、ここまでやってきて良かったと心の底から思えます。自分もS.Blanketを盛り上げることで、新しい人が活躍するステージを用意できる人になりたいですね」

決断の先で開かれた道に間違いはなかった。S.Blanket での山田さんの挑戦はまだ続く。

店長自らシャンプーを！自然とスタッフも同じリズム！

―オーナー、竹内文三の挑戦―

このままでいいのか――

一睡もしないで逡巡した。何かが違う。胸を占めるける不安と対峙して、自分の気持ちに正直に向き合った。竹内文三（たけうち・ぶんぞう）さんが22歳のころである。そして長い夜を超えて朝になった時、こう思ったという。

――上京しよう

それは決して簡単な決断ではなかった。なぜなら今まで築き上げてきたもの全てを捨てるという決断であったからだ。しかし、それが竹内さんのターニングポイントとなり、現在まで続く道のりのスタート地点となった。当時の様子を竹内さんは、このように振り返ってくれた。

「S.Blanket」のオーナーである竹内文三さん

「当時、地元の広島でバーの店長をしていました。18歳になるころには既に働いていて、21歳の時にお店を買わないかと誘われたんです。すごい人気があって、売り上げもかなり上がっているようなお店でしたね。だけど不安があったんです」

その不安と向き合った結果、出した上京するという答え。その裏には、こんな思いもあったという。

竹内さんが語る言葉の１つ１つに熱い想いがある

「確かに全てが順調でした。お店も繁盛していて、街にいる皆が知り合いといった感じだったので、やりやすさもあります。だけど一つの世界ができ上がっていて、物足りなさもありました」

こうして上京をすると決めた竹内さんは、川崎にある親戚が経営する美容室で働くことになった。しかし、ここで徹底的に打ちのめさることになる。

こうして上京をすると決めた竹内さんは、川崎にある親戚が経営する美容室で働くことになった。しかし、ここで徹底的に打ちのめさることになる。

「1年間、お客様の髪を触れない時期が続きました。お客様と話す機会もなく、自分の仕事と言えば、ずっと掃除だけです。また、それまで自分は器用だと思っていたのですが、通信制の美容学校の自習を通して、そうではないことも思い知らされました。挫折感でいっぱいでしたね」

全てがゼロになり、収入も広島時代から激減した。決して楽しくない時期ではあったが、逆に「美容師という仕事に向き合うしかない」と腹をくくれたともいう。そして時が経つうちに、見える景色が変わり始めた。

「1年経ったころにシャンプーを担当し、初めてお客様の髪に触ることができました。3年目でお客様の髪を切ったときは手が震えましたね。いま振り返れば、これまでの生き方から切り替えるために必要な時期であったと思います。最初のお店には7年間いましたが、最初の3年は自分と向き合った時期でした」

S.Blanket の店長の山田さんともそのお店で出会う

そこでプロフェッショナルとしてのベースを作った竹内さんは、次の職場で飛躍することになる。そこは東京の祖師谷にある美容室だった。その店舗で美容師としての自信をつけた竹内さんは、1 年半を過ぎたころ自分の店を出そうと考えるようになったそうだ。最終的に、次のステップとして選んだのは大型店でのキャリアであった。しかし、そこで大きな収穫を得ることになる。

竹内さんの話に時間も忘れて、完全に惹きこまれる

「店舗を統括するマネージャーとなり、美容室の経営を学んだ時期です。現場を学んだ後にマネージャーとなったことで、多くのスタッフとも向き合うことができましたね。だけど、頑張っている人が、どうしても報われない大型店ならではの矛盾に葛藤もありました」

お客様から喜ばれるスタッフが悲しい思いをする。そんな場面も多くあり、「もったいない」と感じることもあったという。

パズルのピースが 1 つずつ埋まっていくように、竹内さんの中にあった思いが具体的な形になっていく。その最後のピースは、そんな悲しい思いをしているスタッフの姿であった。当時、竹内さんは 36 歳である。気が付けば、独立の準備は全て整っていた。これまでのキャリアが 1 つに繋がり、2012(平成 24)年 3 月 1 日、二俣川に「S.Blanket」がオープンする。

ここまで辿りつくまでには、長い道のりがあった

二俣川で開業した経緯をお伺いすると、竹内さんは「頭の中でストーリーを描くことができたんです」と言うと、このような話を聞かせてくれた。

「S.Blanketの出店場所を探しているとき、二俣川を歩きました。そのとき、花屋の横にある空き店舗を見て、すぐにここだと思いましたね。まだお金の目途も経っていない段階でしたが、不動産屋に飛び込みました。既に先客があったため最初は断られてしまいましたが、諦めきれずに何度も通ったんです。そうしたら空きがでて、最終的に借りることができました」

描いたイメージに突き動かされた、竹内さんの強い想いが道を切り開いたのだ。ちなみにその時、竹内さんが頭に思い浮かべたイメージとは、このようなものである。店舗の隣の花屋から仕入れた花に、お客さんが関心を持つ。そして花から始まった話題は、いつしか地域全体のことに移り、結果的に商店街全体に関心の輪が広がっていく。そんな多くの人々が互いに幸せになるようなスト―リであったそうだ。

今後のビジョンについて語る竹内さん

「現在、良いサービスがお客様を呼び、さらにお客様がお客様を呼んで、良い仲間同士が繋がりあうお店になっていると感じています。笑顔や地域性を求める方が、増えてきているのではないでしょうか」

竹内さんが、そう言うように「S.Blanket」に続き、2014年11月1日には2号店の「milk」が同じ二俣川にオープンした。着実に二俣川商店街の地に根付き、その仲間の輪は確実に広がっていっている。

「結婚したスタッフや新たに子どもが生まれたスタッフもいて、家族が増えていくことに喜びを感じます。うちの社員旅行は、スタッフの家族も一緒に行くんですが、私自身のことやお店の考え方などを知ってもらう機会にもなっていますね。スタッフ自身にとっても、大きな責任を持つということは、仕事に向き合う上で大切なことであると感じています」

「S.Blanket」と「milk」で働くスタッフのみなさん

このままでいいのか――

そう悩んでいた一人の青年の一歩が、やがて多くの人の人生に影響を与えた。そして想いを共有する仲間が二俣川で重なりあったとき、それは大きな花を咲かせることになる。その先には、どんなビジョンを描いているのだろうか？最後に竹内さんに聞いてみた。

「もっとお店を、スタッフが夢の持てる場所にしていきたいです。そのためには、そういう笑顔で働ける場所を増やしていくことも必要でしょう。共存共栄していく仲間を増やすことが、魅力ある街作りにも繋げていくとも考えています。私たちの想いに共感する仲間が増えていけば嬉しいですね」

【取材を終えて】

山田さんと竹内さんの語る物語には、不思議と多くの共通点があり、聞く者の心を動かすようなエピソードで溢れていた。こうした二人が、想いを共有して一つのビジョンに向かうからこそ、笑顔で溢れる店作りも実現するのだろう。多くのスタッフの生き様が反映されたお店からは、ほかのお店にはない魅力を感じ取ることができた。

2015年「はまれぽ.com」はまれぽイチオシ掲載ページより全文引用